



Sensitive skin is highly frequent in extrinsic atopic dermatitis and correlates with disease severity markers but not necessarily with skin barrier impairment

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 浜松医科大学 公開日: 2018-05-08 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 矢田貝, 剛 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10271/3344

論文審査の結果の要旨

敏感肌とは環境因子に対する皮膚の過剰反応状態をいい、様々な要因が考えられる。アトピー性皮膚炎(AD)にはアレルギー性炎症としての側面と、角層の構造異常による皮膚のバリア機能障害の側面がある。AD 患者において、敏感肌とバリア機能障害の関連が言われているが、敏感肌に関する臨床的因子は不明である。申請者は AD 患者において、敏感肌と AD 病勢マーカー及びバリア機能障害との関係を調べた。対象は AD 患者 42 名(内因性 AD 患者 10 名・外因性 AD 患者 32 名、健常者 10 名)である。敏感肌の評価は乳酸ステインギングテストを施行し、4つの感覚要素(痛み、ほてり、かゆみ、むずむず感)で評価した。AD の病勢には、かゆみの visual analogue scale(VAS)、生活の質、血中の IgE、thymus and activation-regulated chemokine(TARC)、LDH、好酸球数、Th1 及び Th2 サイトカインを測定した。バリア機能検査として経皮水分蒸散量とフィラグリン遺伝子異常を調べた。その結果、敏感肌の陽性率は AD 患者(54.8%)で健常者(10%)より、また外因性 AD 患者(65.6%)で内因性 AD 患者(20.0%)より有意に高かった。むずむず感スコアはかゆみの VAS、総 IgE、ダニ抗原特異的 IgE、TARC、LDH と正の相関を示した。痛みスコアはダニ抗原特異的 IgE、TARC、LDH と正の相関を示した。しかしいずれの感覚要素スコアも経皮水分蒸散量とフィラグリン遺伝子異常とは相関しなかった。申請者は、敏感肌は外因性 AD 患者に多く、その評価にはむずむず感スコアが重要であること、また AD の病勢マーカーとは相関するが、バリア機能異常とは必ずしも相関しないことを明らかにした。敏感肌と AD、バリア機能異常は強く相関するであろうという従来一般的に考えられていたことを、科学的に検討し証明(一部は否定)したことを、審査員は高く評価した。以上により、本論文は博士(医学)の学位の授与にふさわしいと審査員全員一致で評価した。

論文審査担当者

主査 峯田 周幸

副査 須田 隆文

副査 永田 年